

流れの
先に

離島のくらしと産業を支える水

長良川から知多半島日間賀島へ

愛知県知多半島から約2.4km、三河湾に浮かぶ「タコ(多幸)とフグ(福)の島」として知られる日間賀島。面積0.77km²、人口2,000人余りの島ですが、年間約26.4万人(平成25年)*の観光客が訪れます。この島のくらしと産業を支えるため、水資源機構の施設である長良導水を通じて遠く離れた長良川から水道用水が運ばれています。今回はこの日間賀島について、水の利用を中心に紹介します。

* 愛知県南知多町ウェブサイトによる。

水はどこからどうやって

日間賀島の水道用水はどこからどのように運ばれているのでしょうか？

現在この島の水道用水は、当機構の長良導水施設によって長良川から取水され、地下を通る水路トンネルを通ったあと、愛知県の施設である弥富ポンプ場、筏川取水場を経て愛知県知多浄水場に導水され、浄水されます。水道用水はさらに知多半島内を南下し、南知多町の豊岡ポンプ場、大井配水池を経て、師崎の師崎送水ポンプ場から加圧圧送により海底送水管を通して日間賀島まで運ばれます。取水地点からの送水距離は約90km、うち海底送水管の距離は約2.1km(2条設置)に及びます。

今回の取材では、南知多町水道課の石堂課長及び鈴木主幹をお訪ねし、離島への水道用水の供給について伺いました。

離島への水道用水供給で特に留意するのは海底送水管の漏水管理とのことで、知多半島側からの送水量と島側での受水量の両データを常時チェックの上、その差分で漏水の有無が確認されています。また、島で漏水などのトラブルがあった場合には、夜間でも水道課職員の方が海上タクシーで島に駆けつけ対応をされるとのこと。離島を抱える南知多町ならではの水管理の苦労がうかがわれますが、職員の皆さんは、水道の安定供給のため24時間体制で奮闘していらっしゃいます。



長良川から日間賀島までの水の流れ



師崎送水ポンプ場
(上:外観 下:ポンプ施設等)



日間賀島配水池

